

詩40

150

古文讀本 三の巻

選

古文讀本三の巻

大和田建樹 選



○百濟川成飛彈の工(今昔物語)

宇治大納言源隆國卿

卿は白河天皇の承暦元年、七十四歳にて薨せしむ。老
年の後、夏毎に山城の宇治に暑を避け、人々にたれこれと
物語せさせて聞く好む。たれこれをかきあつめられたるが
つよめて巻をちりつ。今昔物語、宇治拾遺物語にれる。

今とむう。百濟川成やいふ繪師ありけり。世

古文讀本 三の巻

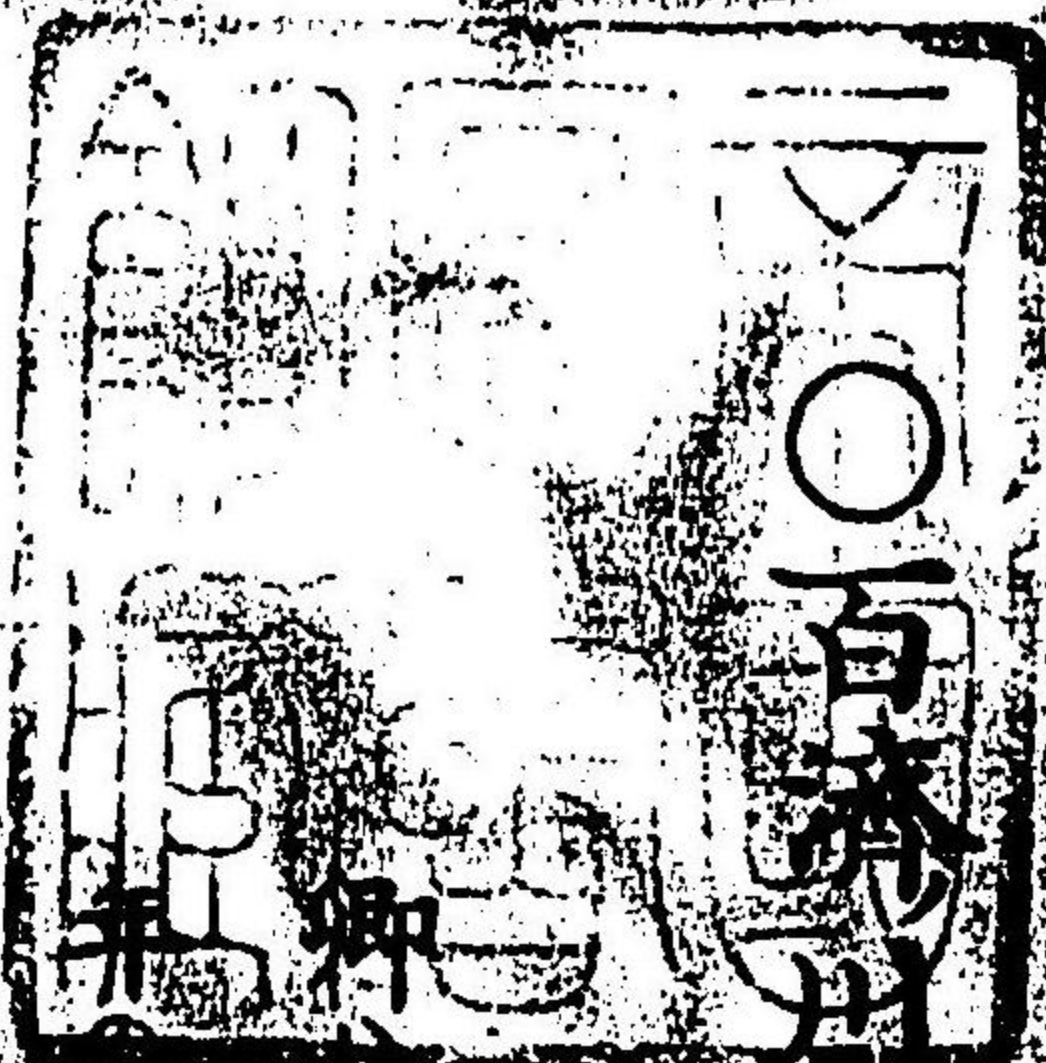
古文讀本三の巻

大和田建樹



○百濟川成飛彈の工(今昔物語)

宇治大納言源隆國卿



白河天皇の承暦元年。七十四歳にて薨せしむ。老
後、夏毎に山城の宇治に暑を避け、人々にたれを以
物語せさせ聞く好む。たれをたれあつめりたれを
つもつて巻をきく。今昔物語。宇治拾遺物語とれり。

今とむり。百濟川成やいふ繪師ありけり。世

古文讀本三の巻

にちきびちきせむにてさうけける。瀧殿の石と
此川成がたてするおのけり。ちきりた清堂の壁
の繪とちの川成がたたるちり。けるあひだ川
成従者の童れまげふる。ひがりに一をせめ
たるにもおめえけりけま。あるあけけしと
べおやとひてかきひていはく。おのれが年ど
ろつうひつる従者れわくをひでに逃げまらり。
こまたづひこころてえちせよ。ちもべろいは
く。おんまはさふいあれども。童の顔を知らた
ば。おのけりめ。顔をきりげりいひてか

うらめこと。川成がふちの事きりひてたけう
のまをさういひて。童のかみおのけりて
ちもべにさし。これに似たるわりのをさる
べおちり。ひがりに一の市に人あつまる所あり。
其の市ににさし。ちもべにさし。い入を。
ちもべ其顔の。おのけりて。ちりり市にゆ
きぬ。人もなめて多ううといひて。これに似た
るわらはさし。ちばらく居て。ちやと思ふほど
に。此よつるわりのいでぬ。其の顔をやり出
で。くさるに。いたる。ちもべにさる。是

ちりりりとかくめて。川成がもまにわたる。川成これを見て見るに其童子りけれがひみどく喜びたり。其ころいみどくさくひといみどく事にちんいひたり。其ころ飛弾の工とくふたふとあつたり。都つつその時のたふとく。世にちりびれさ者ちり。豊樂院に其もく。たふとくたきぐいみどくさく。はくあひとく。飛工の川成とちん各そのわさぐいみどく。飛弾に工川成にしはく。家が一間四面の堂をちんもく。見結く。一室を

ふちて得ちを結く。思ふやだぐいみどく。みどく。中よく。川成飛録の工が。行きて見れを實にさか。飛驒の工。四面。南の戸より。西の戸より。其戸を閉づ。たふとく。南の戸を。北の戸より。其戸を閉づ。西の戸を。

見れば障子のあつた。はぢり其死人のこゝろを
ふらふ。おろけけり。堂にまかりれたるがねを
ふらふてかく。おろけけり。二人の者けり。お
ろけけりあけける。其まらぬものおろけけり。よ
ろづの所に之をまらぬ。皆人ほめける。こ
ろおろけけり。おろけけり。

おろけ 大衆の俗語

時の俗語

従者 讀方に注意すべし

おろけ 俗語

字に注意すべし

おろけ 用方に注意すべし

○蟬丸の琵琶(同トク)

今ハむら。源の博雅の朝臣といふ人ありけり。
延喜の清子の兵部卿の親王とやす人の子あり。
よらげのこややんぢもあつてけり。中にも管絃
の道にちんまはまうたりける。琵琶をとたつた
ひまけり。笛をもえちるびふきり。此人村上の
は時に□□□の殿上人にてありける。其時に逢

それに見し命あらんかともほつうがたし。又
それといのちを知らび琵琶に流泉啄木といふ
曲あり。よきふせにゆえぬが事あり。たゞそれ
盲のこころをきくたるもれ。うまうしてきき
がひくをたのんと思ひて。夜がけ逢坂のをたな
ゆきにけり。はまをたの蝶丸をた曲をひくことな
らうけき。其後三年のあひだ。夜々逢坂の目
ひが庵をたうりにゆたて。その曲を今や弾く。い
まやひくと。ひそかに立ち聞きけき。うまうに
たのぞうけり。三年といふ八月の十五日の夜。

月少うういづもりて。風少ううらふきたるよ。博
雅ありきよよひに興あうが。逢坂の目しひくよ
ひくう流泉啄木いひくうらめ。と思ひて。逢坂に行
きて立ち聞きけるに。目しひ琵琶をうたうら
て。物あはまに思入るけーたうら。博雅ありきを
はめてうら。くちあひてきくほがら。目しひ
こころをやうて詠じていほく。

あよさうけきたの嵐のはげしう

きくうううううううううううううううう

こころ琵琶をたうら。博雅うらをたうて涙をな

うて。あまれく思ふ事なごらむ。目しひむら
ぶに。いふ。あまき興ある夜うれ。もいふれ。あ
らぬ。□□者やせまららん。今宵心得もらん人
の。いふ。物語きん。といふを博雅きて。聲を出
ぶ。て。王城。いふ。博雅といふ者こそ。あまらふ来
ふれ。といひくれば。目しひのいはく。うくやれを
たれ。よら。あはれと。博雅のいはく。我ハ。いふ。い
の人。あまら。あれ。いふ。いふ。後を好む。よら。て。三
年。あまの庵。いふ。いふ。に。きら。る。幸に。いふ。いふ。い
あま。目しひ。いふ。いふ。を。き。て。よら。こ。いふ。其時に博

雅もよろこびちぎら。庵。いふ。いふ。に。入り。て。た。い
に。物。いふ。いふ。いふ。博雅。流泉。啄木。の手。を。あ
ん。こ。いふ。目しひ。故宮。ハ。かく。ち。いふ。深き。給。ひ。と
て。いふ。いふ。の手。を。博雅。いふ。いふ。いふ。博雅
琵琶。を。具。を。いふ。いふ。いふ。口。傳。を。と。て。いふ。い
な。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。い
いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。い
た。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。い
實。に。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。い
いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。い

ア。蜂丸いやはた者ちうといふや。こ
る宮にひき結ひらる琵琶城きつて。いんちんはあ
たる上手にてありけるや。それ目しひよま
アにたれバ。逢坂ふちをさるちうけり。それより
後目しひの琵琶をさる。知るなる。とちん語り傳
へたるや。

管絃

讀方は注意すべし

○文時の詩（同トク）

今ハむ。村上天皇文章をこのまをたまひけ
るあひ。宮に鴛鴦に囀るといふ題をて。詩を
つとを結ひらる。

露濃緩語園花底 月落高歌御柳陰

と。天皇。管原。文時といふ博士をめて。これを講
ぜらるる。文時。詩をつららる。

西樓月落花間曲 中殿燈殘竹裏聲

と。天皇。をさる。我ら。此題ハ

思ふに。文時がほくれる詩まゝい
 る。ごちほをられて。文時を近くめして。清前よ
 て。わづはくれる詩を偏頗なるといふ。ては。ごち
 らびやすべし。ごちふせられらるるに。文時やして
 いとく。御製たへいひふ。下の七字文時が詩にま
 ましていふ。天皇これをきき。うめ。て。よ。め
 う。ごち。さ。き。ハ。饗應の言ち。猶た。う。め。や。す。べ
 し。ごち。ふ。せ。ら。れて。藏人頭□□を。め。て。ごち。ふ。せ
 給ふや。文時。此詩の勝劣をた。う。に。や。さ
 び。今より以後文時がやさん。こと。これに奏し

べう。ごち。ごち。ふ。せ。ら。れ。ら。る。を。文時。き。て。た。を
 め。て。は。ごち。ふ。せ。ら。れ。ら。る。を。實ハ御製
 と文時が詩と對におははくと。天皇。ま。ま。に。さ。つ。の
 ら。ば。誓言を。た。つ。づ。き。ごち。ふ。せ。ら。れ。ら。る。を。文時
 誓言。い。え。め。て。い。や。ら。る。ま。ま。に。さ。つ。の。文時が詩ハ
 い。ま。一。勝。居。よ。う。ら。る。を。ごち。ふ。せ。ら。れ。ら。る。を。ふ。ら。る。
 天皇。ごち。ふ。せ。ら。れ。ら。る。を。感。ぜ。た。と。い。ふ。ごち。ふ。せ。ら。れ。ら。る。
 い。ま。一。の。天皇ハ。文章を。好。む。ごち。ふ。せ。ら。れ。ら。る。を。ごち。ふ。せ。ら。れ。ら。る。
 ぐ。ごち。ふ。せ。ら。れ。ら。る。を。ごち。ふ。せ。ら。れ。ら。る。を。ごち。ふ。せ。ら。れ。ら。る。を。

うつていゆ。屋乃きまふくして神さびた
 り。よりてきこねのうゝの方になれ。ばら
 よりそらだまひ香ひやいのたふはくほの
 だのふほひいづ。きよげなる女房の袖口ごとい
 きたり。額つきよれ三人はのうり簾よりひきて
 らゆ。簾のくさいみどく故あうてをのしをづ
 う。とおもへども。簾のせとふもさうのくうて肉
 のおふせびさふゆふ。夕けう若宮の法袴着に屏
 風志て奪るに。色紙形ふうん料ふ。和歌よとご
 とふうよませせてかゝさきふを。さうのぐのち

のちぬいたごと。歌よとにむめはちうけき
 だ。其のの色紙形ふいづくまうたぬぬ。きんバ
 其うよむべし躬恒貫之めはひまづ。おのく
 とやふあぬよんり。今日にをちうにあり。又こや
 人にさうふまきせうちまきせうち。只今よ
 らてつのはまきしちんや。とちんおほまきせうひひ
 つ。ごい入を。法島おいみどく驚あて。まきとた
 かせらるべぬさふあうん。うねて仰をあら
 んふてけり。躬恒貫之がよみあうんやうにら
 らぶかあうん。まうて俄はらちうちまや仰をこ

をさうおそく〜ゆれ。汝いかちるげ天の責あり
ぶりぬんとす。たまひ他ふ何るげ。老狐の居て人
をまじやつゝもる。鷹大ひさつだまあばぬれ
食ひ殺させて〜もひき。其さあちりたる〜の〜や
せさ。其時ひさしはく。作れ給ふ〜をの〜の〜
きさし〜。只昔より〜し〜し〜あられを。其
よ〜を〜もる。人をまじや〜の〜は
がさるげにあ〜。一両らふ小童部の制一宣入
〜の〜。制止に〜の〜。〜とみげ〜
かま〜事にか〜。今ハ〜ておは〜ま

ち〜の〜。か〜る〜。世間ハ〜まれく
〜の〜。〜の〜。只大学の南の門乃東
ひさし〜。〜の〜。〜の〜。蒙
り〜の〜。〜の〜。〜の〜。宰相
あ〜の〜。〜の〜。〜の〜。宰相
使ふ一孫ひか〜の〜。〜の〜。其
時に〜の〜。〜の〜。〜の〜。〜の〜。
回又十人〜の〜。〜の〜。〜の〜。夜
あ〜の〜。宰相の〜の〜。〜の〜。〜の〜。夜
き。宰相家〜の〜。其後より〜の〜。

上達部殿上人のつづらほつまる装束。うんにも
もつらつづくはくもあつげ。院ハ雲林院の南の
大門の前にして。清馬ふまうて。紫壁におはすま
しつきいんハ。船岳の北おとてに小ねらくにむ
らうつすひあつ。中に遣水をちり石をめて砂を
まきへ。唐錦ハ平張をたて。みも残すけ。しんあつた
ま。た。句欄を。其いみとた事。つらう。う
まふまは。ま。其めつらう。ち。錦のま。く
ま。つらめづらう。ま。は。前。つらう。上達部の座
あり。其次ハ殿上人の座あり。殿上人の座の末に

方に幕にまいて横ばまに和歌よみの座を。き
あり。く。た。ま。ま。つらめま。上達部殿上
人仰せよ依りて座ふしなぬ。和歌よみごもは。の
ねてめ。あ。け。ま。皆まわうてらふ。座にひ入
とおほま。つら。ぬま。仰せよ依りて次第に
よりて座につらぬ。其歌よみ。ハ大中臣能宣。
源兼盛。清原元輔。源重之。紀時文等あり。此五人を。
うひて院より廻ら。文を以て。ま。あ。つら。
ま。つら。皆衣冠を。ま。わ。つら。
あり。す。に。座。し。な。ま。つら。ま。つら。

法興院の大臣
藤原兼家
閑院の大将
藤原朝光

たつ。其時小。法興院の大臣。閑院の大将も。よは事
を。あつ。給ひて。志や衣のくびき。さうて。引きたて
よ。か。お。ら。ぬ。ひ。つ。つ。だ。ち。の。く。さ。さ。り。たる。下。臈。殿
上。人。と。あ。ま。す。曾。母。が。う。ら。に。よ。う。て。幕。ひ。下
より。手。は。ら。へ。入。り。て。曾。母。が。背。の。く。び。き。を。さ。り
この。ち。か。か。し。ひ。さ。さ。り。て。幕。の。外。は。ひ。さ。さ。り
一。き。の。う。ら。に。足。づ。い。殿。上。人。と。あ。ま。す。か。ら。は。せ。ハ
度。が。か。し。ひ。さ。さ。り。け。り。其。時。小。曾。母。が。起。ち。い。ま。り。て。
身。を。さ。さ。り。た。ま。さ。り。て。逃。ぐ。て。ま。り。け。き。を。殿。上
人。の。ち。の。り。隨。身。と。小。舍。人。董。と。曾。母。が。う。

る。後。に。さ。さ。り。て。座。に。し。ま。り。て。手。は。た。し。た。て。ち。か。ら。り。
さ。さ。り。馬。を。さ。さ。り。た。か。し。ひ。た。か。し。ひ。の。さ。さ。り。た。ま。さ。り。て。
お。ひ。さ。さ。り。て。さ。さ。り。た。ま。さ。り。て。お。ひ。さ。さ。り。て。人。老
い。さ。さ。り。て。さ。さ。り。た。ま。さ。り。て。さ。さ。り。た。ま。さ。り。て。か
き。の。り。其。時。小。曾。母。は。國。の。さ。さ。り。た。ま。さ。り。て。座。に
ま。り。て。見。ら。ぬ。ひ。つ。つ。だ。ち。の。く。さ。さ。り。たる。者。と。も。に
む。さ。さ。り。て。聲。を。た。た。し。ひ。さ。さ。り。て。さ。さ。り。た。ま。さ。り。て。
さ。さ。り。た。ま。さ。り。て。我。の。恥。を。さ。さ。り。た。ま。さ。り。て。は。ん。聞。け
よ。太。上天。皇。子。の。日。に。出。で。は。さ。さ。り。た。ま。さ。り。て。座。に。ひ。さ。さ。り。て。撥

ひきかゝるめらきもあつてに。ひきかゝるひらひら
 だ。い。う。見。く。も。い。う。わ。れ。も。ち。き。に。ま
 てる。我も人も馬にのりて河原さまにうち出で
 ぬ。五位のごとにをあやみ童じにちり。利仁が
 こともふを調度うけ舍人雑色ひごりぞあけける。
 河原うちひぎてあはし口ふかゝるに。いづくし
 ぞや。問入。バ。只。い。づ。く。し。や。と。山。科。と。す。だ。ぬ。こ。
 へ。い。の。ぶ。い。づ。く。し。や。と。山。科。と。い。く。は。い。る。か。
 こと。い。を。な。い。づ。く。し。と。て。關。山。と。す。だ。ぬ。や。い。づ。く
 し。い。づ。く。し。井。井。井。に。ち。い。た。る。僧。の。も。ち。た。い。い。ち。い。

ま。い。づ。く。し。に。湯。の。の。す。の。を。思。ふ。だ。ぬ。も。物。づ。る。ほ
 し。遠。く。く。の。を。思。ふ。に。い。づ。く。し。も。湯。あ。け。げ。と
 ち。い。づ。く。し。湯。の。い。づ。く。し。誠。は。い。づ。く。し。わ。て。ま
 る。な。り。と。い。づ。く。し。物。づ。る。な。い。づ。く。し。は。い。づ。く。し。京。に
 て。ち。い。づ。く。し。ま。は。ま。い。づ。く。し。下。人。ち。い。づ。く。し。具。づ。か
 ま。け。か。い。づ。く。し。利。仁。あ。ぢ。も。い。づ。く。し。利。仁。一。人
 け。り。づ。く。し。と。ち。い。づ。く。し。い。づ。く。し。物。ち。い。づ。く。し。食。ひ
 て。意。ぎ。出。づ。く。し。い。づ。く。し。利。仁。ち。い。づ。く。し。い。づ。く。し。て。た
 ひ。づ。く。し。か。い。づ。く。し。い。づ。く。し。の。濱。づ。く。し。狐。の。一。ひ
 走。り。づ。く。し。い。づ。く。し。使。づ。く。し。い。づ。く。し。利。

ふ。月がかりありてみづりけるに。くさき
めみちりぞく。なまこ。又たづのハ丈
なまこ。かばなまこ。に。まて。せ。始の
夜のこ。は。馬に鞍あたるがら
せ。年頃よ
まて。者のおのづ
あるなりけり。

こやたづばん 小屋常番ふ

て其夜の寐ず番

つゆをいふ

けさこめは装束

常服と

こせん

蜜煎にて甘き

晴き着とちり

○腰をれたる雀(同トク)

今ハむろ。春つ。日。か。け。に。
十は。庭に。ま。け。ら。
居。に。ま。け。ら。
石。に。ま。け。ら。
ら。

のうらうらあかぬくれば。あな心。鳥取りてんこ
て。けちうなるいろぎてうて。息一のけなごて
物食をい。小桶に入きてよらさをちむ。明くれを
来くはせ。銅茶にこそげてくはせちるべし。まば。子
ごと孫ちるべ。ありまあうれ。とどい。老いく。雀かを
る。とて。い。み。ま。ら。う。て。月。ら。よ。く。養。入
が。ち。う。く。ま。ま。ら。う。く。雀。の。心。い。ま。ら。う。か。し
ち。い。い。は。し。る。ま。ら。う。み。い。く。く。く。く。と。思。ひ。し
ま。ら。う。う。ら。ま。ら。う。物。行。く。ま。ら。う。入。り。ま。ら。う。見
よ。物。食。い。ま。ら。う。ま。ら。う。こ。い。ま。ら。う。ま。ら。う。子。ま。ら。う。な。ま。ら。う。

あまれもこごみ雀のほろい。あまて。い。く。く。わ。ら。う
ご。い。ま。ら。う。ま。ら。う。か。う。か。う。れ。ま。ら。う。と。飼。ふ。ほ。ま。ら。う。に。飛
ぶ。ほ。ま。ら。う。に。ま。ら。う。に。ま。ら。う。今。い。よ。も。鳥。に。ま。ら。う。か。う。と
て。外。よ。出。て。う。手。に。す。あ。て。飛。び。や。ひ。る。見。ん。と。て。
は。う。げ。た。ま。ら。う。あ。ら。う。く。と。飛。び。て。い。ぬ。あ。ら。う。ま。ら。う
く。月。頃。日。ま。ら。う。く。う。れ。ま。ら。う。を。ま。ら。う。め。明。く。れ。ま。ら。う。物。食
ま。ら。う。な。ら。う。い。て。あ。は。ま。ら。う。や。飛。び。て。い。ぬ。ま。ら。う。よ。又。ま。ら。う
は。ら。う。ん。ご。ん。な。ま。ら。う。づ。れ。づ。に。思。ひ。て。い。ひ。く。れ。ま。ら。う
人。に。笑。ま。ら。う。ら。う。は。て。廿。日。ば。う。う。ら。う。て。此。あ。ら。う
ま。ら。う。居。た。る。方。に。雀。の。い。く。く。鳴。く。あ。ら。う。け。ま。ら。う。雀

罪のつづらぬぐい。こいひくれば。あつひくは
る事をやしてけり。其後大納言と問はれし
て。事のつづらぬぐい。流されたる。應天門を
やちて。信の大臣におらせり。かめおらせり
せり。その。一の太納言も。大納言にも。か
まへけり。事のつづらぬぐい。身も。せり。
いふに。くちや。うけん。

うつり馬 乗替の馬
日の装束 朝服

かたか 乞食をいふや。む詞
けん 今の用法との異同如

まうと 汝小同ト

○焼栗ゆでぐり(同ト)

今いむ。天智天皇の御子に。大友皇子と
人ありけり。太政大臣に。まうと。の
まうと。いひて。けり。あけり。肉ふ。み
せ。つ。次。の。み。つ。に。我。も。思。ひ。給
ひ。清見原の天皇。其時。東宮にて。ま

よ。あまほしきほろに。山城の國たはさくらふち
入。藤とちり。藤もね。五。六。日。に。ぞ。た。ぞ。く。た
は。し。つ。ち。あ。け。る。其。里。人。あ。ち。へ。け。さ。の。嵐。高
く。あ。ほ。え。ら。れ。だ。高。つ。き。た。粟。を。あ。ち。又。ゆ。で。ち。ち
一。こ。も。あ。せ。せ。ゆ。其。二。色。の。粟。を。思。ふ。こ。も。あ
ふ。づ。く。な。ま。ひ。ら。び。木。に。ち。れ。さ。か。の。の。り
ふ。ー。り。び。と。藤。の。里。人。を。見。こ。あ。ち。の。の。り
て。き。も。さ。し。こ。も。あ。せ。せ。ゆ。さ。ま。ら。で。給。ひ。時
摩。の。國。ち。も。し。と。し。て。出。で。給。ひ。ぬ。其。國。の。人
あ。ち。の。の。り。こ。も。あ。せ。せ。ゆ。さ。ま。ら。で。給。ひ。時

あ。の。の。り。こ。も。あ。せ。せ。ゆ。さ。ま。ら。で。給。ひ。時
ま。づ。大。き。れ。の。の。り。こ。も。あ。せ。せ。ゆ。さ。ま。ら。で。給。ひ。時
あ。ち。の。の。り。こ。も。あ。せ。せ。ゆ。さ。ま。ら。で。給。ひ。時
ふ。の。國。の。中。に。な。ら。ん。と。て。美。濃。の。國。へ。あ。ち。の。の。り
ぬ。の。國。の。中。に。な。ら。ん。と。て。美。濃。の。國。へ。あ。ち。の。の。り
給。ひ。た。ら。ん。と。て。美。濃。の。國。へ。あ。ち。の。の。り
あ。ち。の。の。り。こ。も。あ。せ。せ。ゆ。さ。ま。ら。で。給。ひ。時
あ。ち。の。の。り。こ。も。あ。せ。せ。ゆ。さ。ま。ら。で。給。ひ。時
友。大。臣。の。遣。使。と。し。ふ。者。あ。ら。う。て。渡。り。の。船。ぞ。い
こ。も。あ。せ。せ。ゆ。さ。ま。ら。で。給。ひ。時

を催し、さしづかにすれども二三千人兵いで
きたり。それをひき具して大友皇子を遣はさ
せり。近江の國大津といふ所へ逃ひつゝた
つた。皇子の軍やぶれてさうぐい逃げな
るほど。大友皇子といふ山崎ふてさしづ
て。頭をさしづぬ。それより東宮大和の國に
まおほへてさしづ。位につぎはひたる。田原に
うづまはひ。やき栗ゆでぐらひ。形もさしづら
びまひいでけり。今に田原の原ぐらひとて
まはる。志摩の國にておめさせたる者ハ高階
氏の者なり。は

まはる。子孫國守にてハあはれまはる。其水
たけり。はまはる。今に薬師寺にあり。まは
る。不破の明神にてまはる。まはる。

古文讀本
三の巻

古文讀本三の巻終

明治三十二年五月二十日印刷
明治三十二年五月廿四日發行

三卷定價金廿五錢

版權
所有

選者 大和田建樹

發行兼印刷者 大橋新太郎

日本橋區本町三丁目八番地

東京日本橋區本町三丁目

發兌元 博文館

